

◇これを書いているのは、旧年十二月初頭なわけですが、十一月に映画『土を喰らうらう十二月』が上映されていました。主演が沢田研二で原作が水上勉の『土を喰らふ日々』。拙書『おうちで禅』の116ページ、「梅干しと梅酒」で、『土を喰らふ日々』を話題にしています。原作者の水上勉(1919~2004)は福井県に生まれ、禅寺の小僧に出され得度もすませ、妙心寺が設立した旧制花園中学を卒業しますが、禅の道には進まず文学を志します。旧制花園中学で師父・禅博和尚とは同級だったようです。映画の原作となった『土を喰らふ日々』は禅寺の小僧時代におぼえた精進料理をつづったエッセイですが、下段で紹介した新聞記者の佐藤健氏の愛読書とうかがったので、買求めてわが書棚にも並んでいました。映画も見たかったのですが見逃しました。見逃した理由はすでに拙書で扱ってしまった話題なので、「今さら」というケチな見でありました。

後編 集記

◇映画といえば、かつての名作が配信されて、おうちで好きな時に好きなように見られる昨今のようです。そこで、問題になるのが、映像を早送りして、ストーリーだけをとりあえずつかんで、見たことになってしまう。そんな見方。早送りのターゲットは、言葉がなく動きのない画面。でも、そこには監督や俳優がこめた大事なメッセージがあるはず。メッセージというよりは、「間(ま)」といった方がよいかも。「間は魔なり」と言ったのは、どなただったか。うーん、まあーね。わたしも早送り派だから、なんとも言えないけれど。

◇「間」をわたしの拙い文章で表すのはむずかしいけど、たとえば、師走恒例「流行語大賞」の候補になったことばに「知らんけど」があります。これ、関東人にはわかりにくいけれど、昨春、京都へ行ったときに、関西の和尚さんから教わりました。たとえば、こんな風にかうのぞろです。「あんな、大阪南港(なんこう)に大きな空き地ができたやろ。あそこにな、デイズニールランドできるらしいんや(注：偽情報)。どなんしよう」と関西弁でまくしたてたと思ったら、少し「間」をおいて、「知らんけど」と落とす。この面白さは早送りしない、ライブでないとわからない。ライブとは生なこと。生の鮮度をたもつのは、むずかしい。

門を修理しました。門といっても、平成七年に新築し、正門として使っている門ではなくて、境内の北側、一番街商店街に面している門です。扉がゆがんで、地面をこすりながらでないと開け閉めできなくなっていました。修理したのは、山門を新築した金剛組です。金剛組は聖徳太子の時代から続く、日本最古の寺社大工、千年企業です。そんなところへ頼むには申し訳ないような小さな仕事ですが、こころよく引き受けてくれました。



とここで、昭和二十年八月十四日の熊谷空襲を記録した冊子に、現存するこの門を戦災遺構と記述しているのがあります。あやまっています。焼け残った門は危険になつたので昭和五十年代にとり壊して、今ある門は檀家の某家にあつたものを寄付していただき、移築したものです。よく見ると(よく見なくても)、かっこうの良いい門です。普段は閉めていますが、お正月や彼岸、

お盆などの行事には開けますから、見てください。見るといっても、外から見るか！ 内側から見るか！ 門をくぐらずに、外側からみてください。門の屋根と両脇の柱、そして地面に区切られて、額縁に入ったように境内に立つ観音像がおさま

り、その背後には松の枝がのびて、良い景色なんです。たいした庭でもないのですが、視界をせばめて額縁に景色を押しこめたら、おもむきがでる。とここで、夏目漱石に『門』という小説があります。二十八歳の漱石は暮れから正月にかけて鎌倉円覚寺で坐禅をしています。その経験をもとにして、十五年後に執筆したのが小説『門』。この小説の背景からはじまり、なぜか笠置シズ子の「東京ブギウギ」に話題がとぶ文章を『法光』という禅の季刊誌、正月号に書きました。年賀に寺へ来られた方にはお配りしました。読んで！ おもしろいから。(住職記)

連続シリーズ「見つけた」



まんなか配置した墨跡(ぼくせき)、「隻手音聲(せきしゅおんじょう)」と読みます。染筆されたのは、私が修行した埼玉県新座市にある平林寺の現在の老師(ろうし)道場の指導者)です。

「両手で拍れば音がする。片手で拍れば何の音もする」という禅の公案(修行僧に与える課題)です。身近なできごとから、禅が教えようとすることに気づかせる、おもしろい課題です。が、この公案について書くのではなく、手をつつ拍手について考えます。仏教全体ではわからないけれど、臨濟宗に限っていえば、儀式のなかで手を拍つことはありません。でも、拍手と書いて、カシワデとも読むし、前から拍手について勉強しなくては、と思っていたのですが、あることがあって、つけやきばで勉強しました。「つけやきば」を広辞苑は、「にわかになじみ覚えること」と説明してくれます。間に合わせの学習だとしても、「刃」がつかますから、切ることはできません。でも、即席の刃だから、こぼれてとれてしまつつけやきばの浅学非才な素性をかくし、こうした文章を書いていて気がついたことがあります。即席で仕入れた材料を全部使い切らないほうが、厚みがあります。本当は使いたいのだが、決められた字数に収まらないからと、泣く泣く捨てた資料があったほうが安定します。建物の基礎が普通は見えないのと同じです。



なーんて言いながら、拍手に関する本を何冊も買ったから、少し見せちゃいます。おもしろくてためになったのは、そのものずばりのタイトル、茂木大輔著『拍手のルール』(中公文庫)。少し前まで、NHK交響楽団の首席オーボエ奏者だった著者ならでの

困る拍手や、良い拍手を教えてください。そして、次のように述べます。

「日本では芸能に拍手をする習慣はなかったぞつで、それとは別の、神社や神棚への拍手(かしわで)、料理屋人で人を呼ぶときの「お手が鳴る」などは、落後の世界に息づいている。ぱんっ! とか、ぱん・ぱん。というその音色は、打たれる回数が少ないだけに磨かれていて、日本の伝統音楽のように、美しい。」

だいたい、悲しいときには拍手しない。でも、悲しいときにうたれた美しい拍手もあります。佐藤健(1942~2002)という毎日新聞の記者がいました。「宗教を現代に問う」という

企画で、禅の雲水(うんすい)修行僧)になって、実際に道場へ入門し、それを記事にして菊池寛賞を受賞した名記者です。その佐藤さんが(熊谷高校OBなのでさん付け)、定年を目前に末期がんを宣告されます。新聞社は定年を延長して、病室からのルポルターージュを連載します。それは、死の三日前まで続いて、昏睡状態になると後輩記者が引き続き記事を書きました。

平成十四年の歳末に、面会謝絶の病室につめかける「身内の者」を自称する知人と、家族に見守られて息をひきとります。佐藤健と取材班著『生きる者の記録』(毎日新聞社)には、次のように記されています。「ご臨終です」医師が告げた。奥さんが拍手した。そして息子さん、みんなが拍手で送った。

正月に重い話を書いてしまったけれど、これは、美しい拍手ではないでしょうか。